身振りと身体ことば—日本語教育の立場から*

大　塚　容　子

Gestures and Body-part Phrases in Japanese

Yoko Otsuka

Abstract

Many of the idiomatic expressions in any language are often derived from its own cultural background. Japanese idioms containing various body-part phrases also reflect Japanese people's interpretation of acts, events, and relations.

In learning Japanese as a foreign language (JFL), students have much difficulty mastering this kind of expressions coined out of the different culture.

In this paper, we classify these culturally bound phrases in terms of their "gesturalness". We show how difficult these phrases are, based on our investigation of JFL students in Japan. Finally we propose procedures to teach them enlighteningly to students whose mother tongue is other than Japanese.

Key words : gestures, body-part phrases, idiomatic meaning, context

Received Sept. 27, 1993

1. はじめに

日本語は身体部位に関する語彙はほかの言語に比べるとかなり大雑把のようであるが，身体部位をその要素の一部にもつ慣用表現[1]（以下，本名（1992）に従い身体ことばと呼ぶ）は数多く存在する（石野（1989））。身体ことばはその文字通りの動作が意志的動作として実際に行えるかどうかによって大きく二つに分けることができる。動作が可能なものを「身振り表現」，不可能なものを「修辞的表現」と呼ぶことにする。例えば「頭を掻く」は身振り表現の一つであるが，ここで注意しなければならないことはこの表現が単なる身体的欲求（例えば，頭が痒い）によって行われた動作を表しているのではなく，動作主の恥じらいや照れを

表しているという点である。動作が言葉の代わりとなってある特定の意味を伝達しているのである。一方，修辞的表現の一つである「腹を割る」においては「腹」が原義を離れて抽象的な意味で用いられているためにこの表現が表す動作は実行不可能である。この場合，「腹を割る」は個々の語句の意味と語句と語句との文法的関係から算出される意味とは何ら関係のない意味（以下，慣用的意味と呼ぶ）を担っている。「頭を掻く」の場合にはこの慣用的意味を動作が担っていると言えよう。

数の差はあれ，どの言語にもこのような身体ことばは存在する。同じ語句の組み合わせでも言語によって慣用的意味がまったく違う場合もあるだろうし，同一の身体表現が慣用的意味をもつ言語もあれば文字通りの意味しかもたない言語もあるだろう。身体ことばはその言語独特の表現形式であり，またその言語が背景にもつ文化や価値観と密接な関わりをもっているため，その言語を外国語として学ぶものにとっては理解しにくいものである。身体ことばは外国語学習の観点から見ると，二つの難しさがある。一つはその表現が身振りを描写したものかどうかを識別すること，もう一つは慣用的意味（身振りのもつ意味も含む）を理解することである。身体ことばが文化の影響を強く受けているために習得しにくいものであるとすれば，学習者がどういう点に難しさを感じるのか，学習者はどのように理解するのか，母語の影響を受けるのかどうか，効果的な教授法は何か等の問題が出てくる。このようなことから学習者の身体ことばの理解度を調査することは外国語教育に多くの示唆を与えるものだと思われる。それは単に教授法の開発のためだけではなく，日本文化，並びに異文化を理解する上でも有益である。

本稿では英語を母語とする日本語学習者を対象に行った日本語の身体ことばの理解に関する調査について報告する。まず，分析の便宜上，身体ことばを下位分類する。次に調査の報告・分析を行う。

2．身体ことばの分類

Hashimoto et al.（1993）は同じような観点から日本語の身体ことばを細かく分類しているが，本稿では以下のような分類方法をとることにする。

2．1．身振り表現

身振り表現をタイプA，タイプB，タイプCの三つに分類する。

2．1．1．タイプA

前節で紹介した「頭を掻く」はこの典型的な例である。ほかの例を示す。

ⓐ「頭を横に振る」（社長は企画書を見て<u>頭を横に振った</u>。）

ⓑ「手を合わせる」（田中さんはお金を貸してくれた友人に<u>手を合わせた</u>。）

ⓒ「舌を出す」（先生に叱られた花子は「ごめんなさい」と言って<u>舌を出した</u>。）

タイプAは身振りを言葉で書き表したものである。ⓐ，ⓑでは下線で示された動作が実際に

行われており，その動作が動作主の考え（ⓐでは否認）や気持ち（ⓑでは感謝，ⓒでは照れ）を表している。ただしⓒでは実際に舌を出したかどうかは定かではない。タイプAの中には動作が必ず伴うものと任意的なものとがある。しかし，実際の動作が伴わない場合でも「舌を出す」という表現から花子の気持ちを十分読み取ることができる。それは元来身振りを描写していた表現が，その意味だけが抽出されて実際に動作の行われていない場合にも使用されるようになったからである。

2．1．2．タイプB

タイプBは態度や表情を描写したものである。具体例を示す。

ⓓ「目を丸くする」（田中さんは値札を見て目を丸くした。）

ⓔ「鼻の下を長くする」（若い女性に囲まれて鼻の下を長くしているのは誰だろう。）

タイプAと同様，これらの表現からその人の感情を理解することができる。しかし，実際にその動作を行うことができない点でタイプAとは異なる。実際に目の形を丸くすることは意志的な動作として不可能である。ある感情をもった時の表情をそのように認知して表現したものである。

2．1．3．タイプC

タイプCは文字通りの動作が可能であるから，文字通りの動作を表現するために使用されることもあるが，その動作は身振りとしての意味をもたない。従って，身体ことばとして使用される場合には動作は伴わない。タイプCはこの点で身振り表現と修辞的表現との中間にある。タイプCと修辞的表現との違いは，文字通りの動作が可能であるかどうかというところにある。タイプCの表現がもつ慣用的意味は字義通りの動作からの連想によって生まれたものだと考えられる。

ⓕ「手を伸ばす」（田中さんはマンション経営にも手を伸ばしている。）

ⓖ「あぐらをかく」（伝統にあぐらをかいていると，いつかひどい目に遭う。）

「ちょっと手を伸ばせば，取れるでしょう」の「手を伸ばす」は文字通りの意味，ⓕの「手を伸ばす」は「範囲を広げる」という慣用的意味をもっている。

2．2．修辞的表現

修辞的表現をタイプD，タイプEの2種類に分ける。

2．2．1．タイプD

実際に表現された動作を行うことはできないが，身体部位は身体部位としての意味を残しているものである。例を示す。

ⓗ「頭から湯気を立てる」（田中さんは店員の態度に頭から湯気を立てた。）

ⓘ「顔に泥を塗る」（親の顔に泥を塗ってしまった。）

「頭」や「顔」の意味が一般化されたり抽象化されたりしているというのではなく，それぞれ身体部位として認識されている。しかし実際に頭から湯気は立たない。

2．2．2．タイプE

タイプEは身体部位そのものの意味が抽象化されているものである。

ⓘ「目が肥える」（田中さんは目が肥えている。）

ⓚ「顔がきく」（田中さんはこの町では顔がきく。）

「目」は識別力，「顔」は影響力の意味で用いられている。

3．調　　査

3．1．被験者

被験者は南山大学外国人留学生別科で日本語を学ぶ英語母語話者30人である。被験者の日本語力は中級レベル[2]である。

3．2．調査項目

『日本語総まとめ問題集［文字・語彙編］』（佐々木仁子・松本紀子著，1990，アスク講談社）の「慣用句」（pp.70-78）を基に使用頻度が比較的高いと思われる身体表現を調査項目とした。部位は「頭」，「手」（以上各3表現），「口」，「鼻」，「目」，「肩」，「足」，「顔」（以上各2）である。この他に極めて日本的だと思われるもの（「すねをかじる」）と直喩的[3]な身体ことば（のどから手が出る）を加えた。調査項目を以下に示す。

1．頭が切れる
2．頭を掻く
3．頭にくる
4．口が堅い
5．口をへの字にする
6．鼻を高くする
7．鼻につく
8．目を細める
9．目が肥える
10．肩を持つ
11．肩を並べる
12．手を貸す
13．手を抜く
14．手を出す
15．足を引っ張る
16．足を洗う
17．顔に泥を塗る
18．顔を出す
19．すねをかじる
20．のどから手が出る

調査項目を文脈の中で提示するため，調査項目が一つずつ含まれる文（調査文）を作成した。調査文の数は全部で20である。調査文を作成するに当たっては，被験者が既に学習していると思われる文型，語彙を用いるようにした。未習だと思われる漢字には読み方を，単語には英語訳を付した（資料参照）。

3．3．調査の実施

調査は1992年11月18日，南山大学外国人留学生別科の日本語の授業の中で筆者が行った。

被験者には調査文（漢字かな交じり文，身体ことばには下線がつけてある）を一文ずつ読み，その身体ことばがどのような意味をもつかを想像して書く（英語，日本語いずれでもよ

い）ように指示した。調査者は語彙や文型についての質問のみ受けつけた。調査に要した時間は約20分である。本調査の前に身体ことばについての体系的な講義は行っていない。

4．結　　果

4．1．正答数と誤答数

回答は英語で書かれたものが多数を占めている。期待される答，あるいはそれに近いものを「正答」，全く違うものを「誤答」，回答のないもの，「わからない」と書いてあるもの，ごくわずかではあるが判読できなかったものを「無回答」とし，タイプ別にその数を示す（表1）。

表1　結果（N＝30）

タイプ	表　　現	正　答	誤　答	無回答
A	頭を掻く	3	20	7
	目を細める	12	13	5
B	口をへの字にする	13	11	6
C	鼻を高くする	26	4	0
	鼻につく	16	9	5
	肩を持つ	15	11	4
	肩を並べる	1	18	11
	手を抜く	1	26	3
	手を出す	11	12	7
	足を引っ張る	0	23	7
	足を洗う	18	7	5
	顔を出す	28	0	2
D	頭にくる	14	6	10
	顔に泥を塗る	16	10	4
	すねをかじる	20	8	2
	のどから手が出る	13	7	10
E	頭が切れる	8	14	8
	口が堅い	3	16	11
	目が肥える	12	9	9
	手を貸す	29	0	1

4．2．正答

まず，正答とみなしたものを示す。（日本語の回答例の中には表記の変更を行ったものがある。）

表現	回答例
頭を掻く	felt ashamed, baffled, はずかしい
目を細める	happy, smile, heart warming, have warm feeling inside, 嬉しい

口をへの字にする	angry, angry(何も言わずに), 怒っている
鼻を高くする	proud, conceited, 自慢している
鼻につく	get tired of it, get sick of it, become bored with, come to dislike
肩を持つ	take the side of
肩を並べる	equal
手を抜く	neglect
手を出す	put your hand in/to, take a part in, take a risk, play the stock market, play with, 参加する
足を引っ張る	(正答なし)
足を洗う	wash his hands of, quit, stopped doing, reformed, became a new person, 全然しなくなった
顔を出す	come, show your face, show up, 来てください
頭にくる	get angry, be annoyed, annoying, bothers me
顔に泥を塗る	shame, insult, humiliate, disgrace, degrade, tarnish your family's name, 侮辱する, 肩身を狭くさせる
すねをかじる	receives financial support from parents, still depend on his parents, leech off, live at home, live with his parents
のどから手が出る	want it badly, really want, ほしい！！
頭が切れる	sharp, smart, 頭がいい
口が堅い	can keep a secret, won't tell anyone
目が肥える	has good eyes, keen eyes, sharp eyes
手を貸す	lend/give me a hand, help, 手伝う

4．3．誤答

どのような解釈がされているかをタイプ別に見ていく。

4．3．1．タイプA

動作を伴うものである。英語にも "scratch one's head", "narrow one's eyes" と描写される身振りが存在する。

「頭をかく」

"wonder", "thought for a minute", "worry about it", "annoyed" という類の解釈が多く見られる。英語にも "scratch one's head" という表現があるが，中野・カーカップ (1985) が「英語国民の場合，頭を掻くのは，考えている，思い出そうとしている，考えあぐねている，といった場合が多い」(p.99) と述べているように，その動作が意味するところは日本語とは異なる。日本人の中にも困った時に頭を掻く人がいるだろうが，身体ことば「頭を掻く」に英語のような意味はないだろう。

「目を細める」

日本語の「目を細める」と英語の "narrow one's eyes" は字義通りの解釈は同じであるが，描写されている表現は全く異なる。前者は「うれしさやかわいさで，顔に笑みをたたえる」（『例解慣用句辞典』，p.94）のに対し，後者は「まぶしいとき；厳しく相手を見据えるとき；相手に対する敵意・不快・侮蔑・疑惑をあらわにするとき；考えをめぐらす，目をこらすなど，何かに集中するとき，など」（小林（1991），pp.175-176）の表情である。調査結果は，"watchful eye", "keep an eye on them", "disapproved", "got angry", "scored" などである。日本語でも「目を細める」がまぶしい時や遠くのものをよく見ようとする時の目を細くする表情を示すことがあるが，身体ことば「目を細める」が想起させる表情とは異なる。

4．3．2．タイプB

「口をへの字にする」

これは不機嫌な時の表情を描写したもので，思い浮かべるのはぎゅっと口もとをしめた表情であろう。誤答の中では "worry" と書いたものが多く，他に「考えている」，"patiently" などがある。おもしろいのは "(waited) with his mouth open (in thought)" である。「への字」は口全体の形に言及したものであるが，上唇だけが「への字」になっていると考えると口を開けた表情になるように思われる。また，「文句を言って」，"bawls her out", "curse" という解釈があった。不快な感情は理解していると思われるが，「口をへの字にする」という場合には口を閉じて何も言わないというのが条件であると考え，誤答とした。英語には日本語と同じ表情を記述した表現として，"one's mouth bends"（小林（1991），pp.551-552），"draw (the corner of) one's mouth down（同，p.554），"turn (the corner of) one's mouth down（同，p.561）がある。不機嫌な時の表情が同じであっても表現方法は言語によって異なることを示す一例である。

4．3．3．タイプC

「鼻を高くする」

日本語でも英語でも「鼻」は慣用表現の中で得意・高慢を表す部位として用いられているので，この表現は理解しやすかったようである。しかし，日本人が「鼻を高くする」という表現から思い浮かべるのはおそらく天狗だろう。誤答は "exaggerate", "miss him", "full stomach", "too good" である。

「鼻につく」

"Get used to", "become content",「食欲がある」のような反対の解釈が目立った。

「手を抜く」

誤答が2種類に分かれる。一つは "be doing", "take care", "help",「手伝う」，「一生懸命仕事をすること」のように全く反対の解釈をしたもの，もう一つは "not do", "quit",「家事をしない」，「手伝わない」という解釈である。二つ目の解釈は間違いとは言えないかもしれ

ないが，「手を抜く」というのは「しない」のではなく「するのだが，十分にはしない」というところが大事であると考え，誤答とした。

「肩を持つ」

誤答例は "tries to stop", "guilt", "constantly punish" など反対の解釈をしているものが多い。英語には "take/catch/grab/grasp someone's shoulder(s)"という似た表現があるが，これは「逃がさないため；抑制のため；衝動的な接触動作」（小林（1991），p.621）を表す。

「肩を並べる」

日本語とよく似た，「肩」を使った英語の表現は "shoulder to shoulder" で，実際の動作を表す場合と「協力して」という比喩的意味を表す場合とがある（『新英和中辞典』）。誤答は英語の意味を借用したもの（"shoulder to shoulder", "line up shoulder to shoulder", "together" など）と歌のうまさに言及したもの（"sung the right notes", "in harmony", "could be on a stage" など）に分かれる。後者の解釈は文脈の影響であろう。これらのグループに属さないものに "stand proud", "show off", "compliment each other", "take turns" などがある。

「手を出す」

正答，誤答共に「株」という言葉の影響を受けたと思われる答が多い。"The stock drops", "put up for sale", "hand out" などである。

「足を張っ張る」

中野・カーカップ（1985）は文字通りの英語の表現（pull someone's leg）に対して「足をひっぱって，つまづかせる，とは，人をわなにかけるの意味。特に信じやすい人，純真な人をからかって楽しむ場合に用いられることが多い」（p.211）と説明しており，英語・日本語いずれの場合もマイナスの意味をもつ。誤答は英語と同じ解釈を与えたもの（"pull one's leg", "make fun of", "trick", "joke"など）と日本語の本来の意味とは逆の解釈を与えたもの（"support", "help", "lead", "root for our team" など）である。英語の表現にもマイナスの意味しかないにもかかわらず，このプラスの意味はどこから出てくるのだろうか。日本人の中にははしごを上っていく人の足を下から引っ張るという像を思い浮かべる人がいるようである。

「足を洗う」

「洗う」に汚れた物をきれいにするという意味があり，また英語にも "wash one's hand of" という表現があるので理解しやすかったようである。英語では足ではなく手が使われている。日本語にも類義表現に「手を切る」がある。"Stole", "cleaned out", "sneaky", "keep secrets" が誤答の例である。因に『ルーツでなるほど慣用句辞典』によれば，これは「昔，インドで，はだしで托鉢をしていた僧が，その日の行を終えて庵に帰り，足を洗ってから法話をしたことから生じた言葉」（p.15）のようである。

「顔を出す」

英語にも「顔」を使った表現，“show one's face” がある。

4．3．4．タイプD

「頭にくる」

日本語における感情表現は，一般に感情の経験者を主題に立てて表現することが多い。「頭にくる」の場合も「(人) ハ (もの・事態) ガ頭ニ来ル」(宮地 (1982)，p.24) という形で用いられる。ところが英語の場合は，感情の原因を主語に立てて表現することが日本語より多いようで，そのような回答が正答に多く見られた。誤答には “it comes to my head”, “cut off his head”, “headache”,「頭が痛い」などがある。

「顔に泥を塗る」

日本語では「顔を立てる」,「顔を潰す」など「顔」が「面目」の意味で使われている表現がいくつかある。同様に，英語にも “lose face” (面目を失う)，“face-saving” (顔を立てること) という表現がある (中野・カーカップ (1985)) ことから，この表現は理解しやすかったようである。また，一般的に言って「泥」を美しいものと認識することはしないだろう。間違った解釈をしたものの中にも「泥を塗る」ことに対してプラスの解釈をしたものはない— “speak poorly about your parents”, “parents gossip”, “speak rumours”, “angry”, “embarrass”。

「(親の) すねをかじる」

日本語独特の表現だと思われるが，文脈の影響か理解しやすかったようである。“Nags his parents”, “not married”, “ruin my life” などが誤答である。「擂」は「労働によって金を生み出す元という象徴的な意味を持つ語といわれ」(『ルーツでなるほど慣用句辞典』，p.93) ているが，その象徴的意味をこの表現から感じ取る日本人は少ないと考えタイプDに分類した。

「のどから手が出る」

この表現は通常「ほしい」の修飾要素として用いられる。問題はその修飾的要素をどう解釈するかである。誤答は次のようである— “I'd kill for it”, “can do everything”, “really don't want”, “want to grab it by the throat”。

4．3．5．タイプE

「頭が切れる」

この表現における動詞「切れる」は通常の可能形とは異なり，受動的可能表現 (寺村 (1982))[4]と言われるものである。その点が理解されていないと正しい解釈はできないだろう— “can not make up his mind”, “stupid”, “forgetful”, “sort of a dunce”。他に完全な誤りとは見なせないものに “have opinion”, “have a good idea”, “organized” がある。

「口が堅い」

堅い口の持ち主とはどんな人物だろうか。二つの考え方があるようである。一つは堅さを

長所とする考え— "he talks well", "talk about anything", "constantly talks", "good speaker", もう一つは短所とする考え— "use slang", "vulgar", "rude" である。正答に近いものに "doesn't speak much", "quiet" がある。

「目が肥える」

誤答は次のようなものである— "used to", "accustomed to", "gained strength", "eyes become bad", "has a good imagination", "fertile imagination" など。

「手を貸す」

英語にも "lend/give a hand" という表現がある。

5．考察—日本語教育の立場から

調査結果全体を見ると，「鼻を高くする」，「顔を出す」，「手を貸す」の正答率が高いことがわかる。いずれも被験者の母語に似たような発想・表現がある。このような場合，母語における意味を日本語に当てはめて解釈しようとするのは，語彙や文法の誤用にも見られることである。これらは母語の影響が「正」の方向に働いたものと言えるだろう。逆に「負」の方向に働いたと思われるものに「頭を掻く」，「肩を並べる」，「足を引っ張る」を挙げることができる。殊に「頭を掻く」のように身振りのある表現には教育上注意が必要である。よく例に出される，日本人の手招きが英語社会では「向こうへ行け」と解釈されるというのも一つの身振りが言語によって異なった解釈を受ける例の一つである。従来，日本語教育においてジェスチャーや身振りの教育にはあまり注意が向けられていないように思われる。タイプA，タイプBの表現の正答率の低さを見ると，身振りを読むことだけではなく，表現から実際の身振りや表情を再生することも必要である。現実をどのように言語化するかは言語によって違うからである。

タイプCは字義通りの動作からの連想によって慣用的意味が生まれるものである。本来は動作を描写していたものが，実際に動作が行われないところまで使用範囲が拡大され，意味が抽象性を帯びている。抽象化の過程は言語によって異なる。被験者のタイプCの表現に対する解釈の多様性は，タイプCのもつ，この抽象性と文脈の影響によるものだと考えられる。動詞「洗う」は4．3．3．で述べたように抽象化された意味が比較的容易に想像できる。一方「つく」，「持つ」，「抜く」，「引っ張る」，「出す」のような動詞はその使用範囲が広く，本来の動作にどのような像を求めるかによって抽象的意味は多様化する。

ここで，被験者が調査文をどのように理解しようとするかを探ることによって，抽象性と文脈の問題，つまり表現の抽象性と文脈が理解度に影響を与えるのではないかという問題について考えてみる。まず，比較的正答率の高い「鼻につく」の調査文「好きなものでも毎日食べていると，鼻につく」の場合を考える。被験者が最初に考えるのは「何」が鼻につくのかだろう。鼻が嗅覚器官であることを考えれば，おそらく「におい」が第一に上がるだろう。

事実,「鼻につく」は「消毒液のにおいが鼻について気分が悪い」のように，文字通りの意味でも用いられる。調査文では食べ物が話題になっており，食べ物をにおいと関係づけることはそう難しいことではないだろう。その上,「好きなものでも」という逆接の句があれば「嫌いになる」という解釈を引き出すことは容易である。しかし,「鼻につく」はさらにその意味が抽象化されて「あの人の態度が鼻につく」,「あの人が鼻につく」という用いられ方をする。もしこの考え方が正しければ，このようなより抽象度が高く，文脈に解釈の手がかりになる要素のない文を調査文に選べば，正答率に変化が現れることが予想される。

次に正答率の低い「足を引っ張る」(「一君はいつも私たちのチームの足を引っ張っている」)の場合を検討する。「足を引っ張る」は抽象化の過程でマイナスの意味が付与されている。この意味の転化に何らかの理論的根拠があるとは思えない。解釈の多様性は被験者が「足を引っ張る」から想起する場面の多様性による。「足を引っ張る」場面は色々ありそうである。「下に引っ張って降ろす」（例：はしごを上っている人の足を上に行かせないように下に引っ張る）と考えればマイナスの解釈,「上に引っ張り上げる」（例：小さな穴にはまった足を引っ張って外に出す）と考えればプラスの解釈が生まれるのではないだろうか。次に文脈を見てみると，一君についての情報がない。文脈に解釈の手がかりになるものがない場合にはいずれの解釈も可能になるのである。例えば「サッカーの下手な」といった修飾句があればマイナスの解釈を促すことになっただろう。「肩を持つ」の場合も，被験者が想起する場面によって，そこから引き出される抽象的意味は変わるだろう。

タイプDについても同様のことが言えそうである。「泥」を美化する文化があれば，その文化をもつ言語話者には「顔に泥を塗る」をマイナスの意味に解釈するのは難しいだろう。「すねをかじる」が理解しやすかったのは文脈によるものだろう。小さいころから独立することを教えられてきているアメリカ人の被験者にとっては,「三十才になっても」という逆接の句と「親」が与えられたら,「まだ独立していない」という解釈は当然の帰結であるように思われる。

教育的に見ると，以上のことは語彙・表現を教える際の文脈の重要性を示している。特に文化的影響を強く受ける身体ことばの場合には，より具体的なものから抽象的なものへと提出することによって表現の文化的背景を教えることが重要である。表現の持つ微妙なニュアンスは抽象化の過程で生まれてきたものだと考えられるからである。

タイプEは「手を貸す」以外は正答率が低い。タイプEがほかのタイプと違う点は身体部位が身体部位としては認識されておらず,何か別の物に見立てられているということである。見立てるところから比喩（metaphor）が生まれる[5]。「口」,「目」の身体ことばの比喩的機能については本名（1992）に説明があるので，ここでは「頭」の比喩的機能について考える。「頭が切れる」では「頭」は刃物に見立てられている。それは「切れる」の意味を考えれば明らかである。「切れる」は「このナイフはよく切れる」という形で用いられ，それはナイフ

の属性を表す文である。頭の良さをナイフの鋭さに例えることによって「頭が切れる」が成立するのである。頭にはこれ以外にも比喩的機能がある。「頭に入れる」,「頭が堅い」においては頭は容器であると言えるだろう。頭の形状から容器という比喩が生まれる。覚えるという行為を，認知体系が納められている容器の中に何かを入れることと見立てるのである。そしてその容器が柔軟であれば自由自在に形を変えうる。考え方に柔軟性のない，頭の堅い人は柔軟性の乏しい容器の持ち主ということになる。

「頭」に関連して「顔」にもおもしろい比喩的機能がある。「顔を売る」は「顔」を商品と見立てた表現である。顔は人間の身体部位の中で最も目立つ部位である。この考え方が一般化されると顔が人間の代表，あるいはシンボルになる。本人であることを証明するための書類（身分証明書や運転免許証等）に顔写真が貼ってあるのはその表れである。さらに一般化がすすむと人間にだけではなく物にも使われるようになる。「ロビーはホテルの顔だ」はその例である。顔がその人のシンボルになるという考え方から，顔は自分自身の名前が大きく書かれた商品だという発想が生まれる。その商品を売れば売るほど自分の名前が世間に知られ有名になるというわけである。

このような比喩的表現はそれぞれの言語の文化や価値観を反映している。「頭が切れる」とは「頭の回転が速く，するどい」（佐々木・松本（1990），p.70）ことだと被験者に説明するだけではなぜ「切れる」という動詞が使われているか理解できないし，具体的な人物像を想起することも難しいだろう。比喩的機能を説明することにより，身体ことばの理解が深まるだけではなく，外国語学習のおもしろさも増すのではないかと思われる。

以上，タイプ別に問題点を見てきたが，まとめると次のようになる。

①学習者は日本語の身体ことばを自分の文化で解釈しようとする傾向がある。ただしこれは身体ことばに限った傾向ではない。

②身振りの表す意味だけではなく，身振りの言語化の方法も言語によって異なるので，実際の身振りや表情を描写した表現には教育的配慮が必要である。

③抽象化された身体ことばは文化の影響を受けているので，その過程に注意を向けさせることが理解の助けになるであろう。そのためには特に導入の仕方に工夫が必要である。

6．お わ り に

身振りが国によって異なった意味を表すのと同様に，身体ことばもその国の生活習慣，文化と密接な関係をもち，独特の意味を表す。身体ことばがもつ文化的側面をも考慮に入れた教育が必要である。単に，表面的な意味が教えられても，その言葉から日本人が連想するものがある程度理解できなければ，その言葉の真の意味が理解できたとは言えない。実際に適切な場面で使用することも困難であろう。

今回の調査では被験者の回答からその意味するところを読み取ったわけだが，回答に至る

までのプロセス，つまり被験者が使った「推論」を面接などにより調査することも興味深いことである。また，タイプ別の調査項目数が一定ではなかったので，タイプ別の傾向を見ることはできなかった。英語話者だけではなく様々な言語話者に調査を広げることによって異文化，日本文化への理解をさらに深めることができるだろう。これらは今後の課題としたい。

謝辞　本調査にご協力下さった南山大学外国人留学生別科の先生方，学生の皆さんに心からお礼申し上げる。

* 本稿は Hiroko Hashimoto, Yoko Otsuka, Mihoko Kato and Nobuyuki Honna, 'Teaching Japanese Body-part Phrases to JFL Students' (a paper presented at the 4th International Cross-Cultural Communication Conference, The Menger Hotel, San Antonio, Texas, U.S.A., March 24-28, 1993) の一部をもとに加筆修正したものである。

注

(1) 慣用表現については色々な定義がある。ここでは統語的には語句と語句との結合性の強いもの，意味的には個々の語句の意味の結合から理解できない意味をもつものと理解しておく。

(2) 中級レベルとは，200～300時間学習した学習者のことをいう。助詞の機能，活用語の活用，受け身，使役，敬体についての概念を知り，正しい使い方ができ，語彙約1500～2000語，平仮名，片仮名と基本的な漢字約500字の音訓の読みと書きができる。(『日本語教育事典』，p.633)

(3) 宮地 (1982) は慣用句を連語成句的慣用句と比喩的慣用句とに分け，さらに後者を直喩的慣用句と隠喩的慣用句とに分けている。直喩的慣用句とは，比況の表現「ヨウ」や程度の表現「ホド」などと共に用いられる慣用句のことである。

(4) 受動的可能表現とは次のような形と意味をもつものである。

　Xガ　V－可能形

　　X：V－の表わす動作を受けるもの

　　構文全体の意味：XガV－されることが一般に可能である。　(寺村 (1982)，pp.259-260)

(5) Lakoff and Johnson (1980) は "The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another." と言っている。(p.5)

引　用　文　献

『新英和中辞典』(第4版) 研究社

『例解慣用句辞典』創拓社

『ルーツでなるほど慣用句辞典』集英社

石野博史 (1989)「身体に関する慣用表現」『月刊言語』18巻2号　大修館書店

小林祐子 (1991)『しぐさの英語表現辞典』研究社

佐々木仁子・松本紀子 (1990)『日本語総まとめ問題集［文字・語彙編］』アスク講談社

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
中野道雄・ジェイムズ・カーカップ（1985）『日英比較ボディ・ランゲージ事典』大修館書店
日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』大修館書店
本名信行（1992）「身振りと身体ことば」『月刊言語』21巻1号　大修館書店
宮地裕編（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
Hashimoto, Hiroko, Yoko Otsuka, Mihoko Kato and Nobuyuki Honna, 'Teaching Japanese Body-part Phrases to JFL Students' (a paper presented at the 4th International Cross-Cultural Communication Conference, The Menger Hotel, San Antonio, Texas, U.S.A., March 24-28, 1993)
Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press

参 考 文 献

『日本語大辞典』講談社
国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4巻1号　明治書院
阪田雪子（1990）「連語・慣用句」『講座日本語と日本語教育7　日本語の語彙・意味（下）』明治書院
中村　明（1985）「慣用句と比喩表現」『日本語学』4巻1号　明治書院
中村　明（1985）「比喩の分類に関する問題抄」『日本語学』4巻6号　明治書院
秦　恒平（1984）『からだ言葉の本』筑摩書房
星野　命（1976）「身体語彙による表現」『日本語講座4　日本語の語彙と表現』大修館書店
Otsuka, Yoko (1991) 'Metaphorical Expressions of Body Parts in Japanese' (a paper presented at a nonverbal communication panel of the 3rd International Cross-Cultural Communication Conference, National Cheng Kung University, Tainan, R.O.C., April 1-6, 1991)

資　　料

調査文

＊次の下線の言葉がどんな意味か，思ったことを書きなさい。

1. 三船部長は頭が切れるから，大切な仕事はすべて任せられている。
2. 授業に遅れてきた一君は，先生に「今日も遅いですね」と言われて頭をかいた。（かく：scratch）
3. となりの犬が毎晩うるさいので，頭にくる。
4. 田中さんは口がかたいので，この話をしても大丈夫だ。
5. 夜の12時になっても娘が帰ってこない。父親は口をへの字にして娘を待っていた。
6. 息子が東京大学に入ったので，両親は鼻を高くしている。
7. 好きなものでも毎日食べていると，鼻につく。
8. おばあちゃんは孫が遊んでいるのを見て目をほそめた（ほそめる：ほそくする）。
9. 田中社長は目が肥えて（こえる：grow fertile）いるので，この絵が本物ではないことがすぐわかった。
10. 妹とけんか（けんか：fight）をすると，母はいつも妹の肩（かた：shoulder）を持つ。
11. 雪子さんと一君は歌のうまさで肩をならべて（ならべる：line up）いる。
12. この荷物を運ぶので，手を貸していただけませんか。
13. 忙しいので，家事の手をぬいて（ぬく：pull out）いる。
14. 株（かぶ：stock）に手を出して，失敗（しっぱい：fail）した。
15. 一君はいつも私たちのチームの足をひっぱって（ひっぱる：pull）いる。

16. 彼は泥棒（どろぼう：theft）の仕事から足を洗った。
17. 親の顔に泥（どろ：mud）を塗る（ぬる：spredad）ようなことはしないでください。
18. 明日のパーティーには顔を出してください。
19. 黒川さんは30才になっても，まだ親のすね（すね：shin, leg）をかじって（かじる：gnaw）いる。
20. 私はワードタンク**が喉（のど：throat）から手が出るぐらい欲しい。

**ワードタンクとは電子辞書のことである。